

令和元年6月

一橋大学

平成31年度一橋大学推薦入試 第二次試験

出題の意図等 【小論文】

## 商学部

設問 1：課題文該当箇所（経済学的な観点からの意見）に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：「経済学の考え方に基づけば、第 1 に便乗値上げは不公正なものではなく、第 2 に値上げによってフロリダ住民は様々な面で助かると考えられるからである。前者については、価格は単に需要と供給のバランスによって決定されるものであり、そもそも公正な価格は存在しないためである。後者については、価格が需要と供給によって決まる結果、価格の上昇によって生活資材等の無駄な消費がおさえられたり、遠隔地の業者がフロリダに製品を提供するインセンティブが高まったりすることになり、必要な人に必要な価格で届くからである。」

設問 2：課題文該当箇所（便乗値上げ禁止法反対派と賛成派の幸福および自由という観点からの意見）に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：「便乗値上げ禁止法に反対する人は、市場は社会全体の幸福を増大させ、また市場が機能するためには個人の自由を尊重することが重要であると考えており、便乗値上げによって市場を束縛することは、幸福の最大化と自由の尊重を損なう点で問題であると指摘している。これに対して、便乗値上げ禁止法を擁護する人は、便乗値上げによって一部の人々の市場から締め出してしまうことが全体の幸福を考える上で考慮されていない点や、特定の状況下では買い手に自由はなく、取引は自発的ではない点を問題視している。」

設問 3：課題文該当箇所（美德を巡る議論に対して人々が戸惑いを覚える理由）に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

「便乗値上げ禁止法を擁護する人たちは、便乗値上げを行おうとする人たちは強欲であると考え。この強欲は悪徳であり、公益のためには犠牲を分かち合うべきだという市民道徳と対立する。したがって、社会はこうした強欲な振る舞いを罰するべきであるというのが美德をめぐる議論である。しかし、こうした議論は、一方で直感的には人々に受け入れられるものの、他方で何が美德で何が悪徳かの判断が独善的であり、それを判断する主体が政府や立法であることに懸念

を生み出す。美德や悪徳という道徳的問題について政府は中立的であるべきであると感じるからである。それゆえ、美德についての議論には人々の戸惑いが生じるのである。」

設問4：2つの異なる考え方を整理した上で、自身の主張を明確かつ論理的に説明することができるかを問う問題。

解答例：「正義に関する古代の議論では、正義とは人々にふさわしいものを与えることであり、何が美德かを決めた上で公正な法律が決まると考えている。それに対して、近現代の理論は、各人が良き生き方に関する自らの考え方を選ぶ自由を尊重するのが公正な社会だと考えている。このような議論に対して私は現代の日本社会は、今一度古代の議論に立ち返るべきだと考えている。その理由は、第1に、自由を尊重する社会が様々なひずみを生み出しているからである。本文の便乗値上げの例のような経済的あるいはその他の理由によって人々が市場から締め出されてしまう事態は現代でも多々生じており、自由や市場の重視が社会的幸福を増大させてはいない。第2に、自由の尊重が日本社会の特性とそもそも不適合な可能性がある。表面的には個人の自由を尊重する立場がとられながらも、実際には暗黙的に社会や集団の価値観に沿わない意見は排除される傾向にあり、特定の価値観によって個人の自由が制限されていることが多い。こうした日本社会の特性自体を変えることは難しい。そのため、何が日本にとって望ましい生き方かを明示的に改めて議論した方が公正で幸福な社会に近づくと考える。」

尚、上記はいずれも解答例であり、その他のアプローチを排除するものではない。

## 経済学部

設問(1), (2)では、働き方改革に対する賛否両論について、それぞれの視点を理解し、客観的かつ多角的に本改革を評価できる能力があるかを問うている。例えば、労働者の視点と企業・経営サイドの視点の両方を考慮した議論を展開するなどして、改革によって改善が期待される点と懸念事項を同時に矛盾なく、かつ説得的に説明することが可能である。

設問(3)においては、現在の日本の労働市場が抱える問題を把握しているか、またその問題について自分なりの意見・考えを持ち合わせているかを問うことで、社会問題に対する意識の高さを確認している。さらに、解答においては、自分の問題視する状況と働き方改革とを関連付けて説明する必要があるため、求められた条件の下で、論理的かつ説得的に議論を展開する能力を見ている。

## 法学部

本出題は、法学・社会科学を学習するための基礎学力を問うことを目的に、社会科学における考察それ自体のあり方を論じた古典的著作であるデュルケームの「社会学的方法の規準」を題材として、受験者の文章理解と表現力に加え、思考的応用力と説明・弁証能力を試すものである。

設問1は、主に文章理解を問うものである。冒頭の一文は爾後に説明する内容を簡潔に示したものであり、広く文章全体から、従前の社会学のあり方についてのデュルケームの批判を要約することが求められる。

設問2では、文章を理解した上で、それに対する自らの態度または評価を説得的に説明する能力が問われる。傍線部は設問1で示された問題を踏まえた上での自戒的警句であるが、字句のままこれを読むならば、それが適切であるかどうかには疑問が残る側面もあるものと言える。受験者には、自らの理解と立場を示した上で、そのような立場を取る理由を弁証することが期待される。

なお、設問2については、デュルケームが直面していた時代の特性ないし限界にも目を向けると同時に、遥かに進歩を遂げた現代において、我々はむしろ科学という衣装に隠れた主観や観念に一層縛られているのではないか、といったように、古典的著作が思惟や認識において持ちうる恒久的な価値について考察が及ぶことも期待されていた。

## 社会学部

AI 技術は今日脚光を浴びている技術である。それは私たちの社会のあり方のみならず、その社会に生きる個人にとっても、人生に大きな影響を与える可能性を有する技術である。ただ一方で、この技術の可能性については、異なる前提からさまざまに述べられており、それらを単に受容するだけでは、その意義を知的に構成することができないような形で、情報が与えられている。本問は、このような散在する情報を、知的に構成しつつ受容できているかを問うことを主たる目的としている。

その上で、本問では設問の前段と後段でそれぞれ異なる課題を設定している。

まず前段について。AI 技術の社会に対する影響は、何を AI と呼ぶのかによって様々に論ずることができる。またどのような社会的影響に着目するかによって、AI をどのように定義すべきかも変わってくる。概念的連関を適切に理解した上で、AI をどのように定義しているかを問うているのが本問の前段部分である。このような概念操作ができることは、社会科学的・人文科学的研究においては必須であり、このような知的作業の準備ができているかが問われている。

本問の後段は、AI 化する社会についての展望を論ずることを求めているが、ここでの意図は、単に未来について想像することを求めているのではなく、不確実な未来に対して、現在および過去の情報からいかに展望することが可能であるかを考慮した上で、根拠を示すことができるかを問うている。